

『窓ぎわのトットちゃん』中国語訳本における 文化の翻訳

——民俗信仰関連の言葉を中心に——

屈 豎 萌

Cultural Translation in the Chinese Versions of *Toto-Chan:
The Little Girl at the Window*

With a focus on the related words of the folk beliefs

QU Shumeng

Toto-Chan: The Little Girl at the Window is an autobiographical novel written by Tetsuko Kuroyanagi, published in March 1981 in Japan by Kodansha, and has been translated into various languages, as a good material for contrasting research between different languages. Author's ultimate goal is to consider the mainland Chinese versions based on previous research, and then proceed with the research by adding the Taiwan version as well. This paper focuses on words related to folk beliefs. After introducing the Chinese Versions, we compared each Translation version. Through the translations of each Chinese versions, we explored the translation characteristics of the Chinese versions of *Toto-Chan: The Little Girl at the Window*, and clarify the differences between the translations of Chinese mainland and Taiwan. And then, through translated words, we considered how the culture related to Japanese folk beliefs is transmitted to Chinese readers.

Keywords: *Toto-Chan: The Little Girl at the Window*, Chinese Versions, Cultural Translation, Folk beliefs

キーワード：『窓ぎわのトットちゃん』、中国語訳本、文化の翻訳、民俗信仰

はじめに

『窓ぎわのトットちゃん』は黒柳徹子によって書かれた自伝的物語であり、1981年3月に講談社より発売されて以来、様々な言語に翻訳されており、異言語間の対照研究に資する資料としての一面も兼ね備えていると考えられる。『窓ぎわのトットちゃん』の中国語訳本に関する研究は中国大陸の訳本と台湾の

訳本のそれぞれを対象として行われてきた。

中国大陸訳本の研究は主に7種類の版本の中から二、三種類を抽出し、対比研究を行い、適切な訳し方であるかどうかという翻訳の問題点に関する考察、児童文学の観点からの翻訳策略の考察が主である。一方、台湾の訳本の研究は語彙分類の作業を土台とし、日中の語彙の類似点、相違点、及び訳語の問題点を考察したものが主である¹⁾。

まず、翻訳語彙に関する主な先行研究を見ておきたい。鐘季儒(2004)²⁾は、台湾版の蕭蘭訳本の特徴と問題点を中心に考察した。蕭蘭訳本の特徴として訳文は簡潔明瞭であり、四字熟語を多用し、訳者からの補充説明が多いことを明らかにし、一方、原文とのニュアンスの差と誤訳が存在するという問題を指摘した。

林玉恵(2009)³⁾は擬音擬態語に関して台湾版の8種類の中国語訳を調査資料として取り上げ、特にABAB型の擬音擬態語の特徴を考察するとともに中国語の訳語の問題点を検討し、訳されなかった語が多数あること、同一の訳本で同一の語が何種類にも訳されていること、訳し方の種類が多いこと、誤訳が見られることを指摘した。

林玉恵(2010年)⁴⁾は中国語訳本の文化の翻訳に関して、台湾版の8種類を対象として、文化関連の語彙50語を取り上げ、語彙分類表に基づき、「節、節目」、「神仏、精霊」、「サービス」、「行事、式典、宗教」などの28項目に分類し、比較研究を行った。その上で生活関連の言葉が文化関連の言葉の中で多く比重を占めていると指摘した。また各台湾版の中国語訳の対比を通じて、台湾の中国語訳の問題点及び訳し方を整理した。

上述したように、『窓ぎわのトットちゃん』に関する中国語訳本の研究は中国大陸版あるいは台湾版が別々に考察され、大陸版と台湾版の全てを対象とする考察はまだない。また文化を翻訳した言葉に対して、訳し方を紹介してはいるが、その背後の文化現象についてはまだ触れられていない。さらに、その訳し方を通じて、日本の独特の文化要素がその時期の目標読者にどのように伝えられたのかという点についてはまだ考察していない。

筆者は先行研究に基づき、まず中国大陸版の訳語について考察した上で、台湾版も加えて研究を進めて行くことを最終目標としている。本稿では大陸版5種類と台湾版10種類を対象に文化翻訳状況を考察したい。まず、各訳本を紹介した上で、比較を行う。そこから中国語訳の特徴と文化概念を表す言葉の

1) 代表的な論文には以下のものがある。①林立萍「中国語『窓ぎわのトットちゃん』語彙データについて—第1章から第10章まで一例に一」(『台大日本語文研究』、第10期、2005年)、85-106頁。②林立萍「中国語訳『窓ぎわのトットちゃん』語彙データの構築について—その2 単語分析についての諸問題—」(『国際シンポジウム比較語彙研究 VII』、語彙研究会、2004年)、23-34頁。③林玉恵「中国語のコード付けの基準と手順—中国語の『窓ぎわのトットちゃん』を例として—」(『国際シンポジウム比較語彙研究 X』、語彙研究会、2006年)、29-40頁。

2) 鐘季儒「中国語『窓ぎわのトットちゃん』語彙データの構築について—その4 訳本の諸問題—」(『国際シンポジウム比較語彙研究 VII』、語彙研究会、2004年)、55-63頁。

3) 林玉恵「『窓ぎわのトットちゃん』から見る擬音語・擬態語の中国語の問題点—ABAB型の擬音語・擬態語を中心に—」(『語彙研究会(7)』、2009年)、20-29頁。

4) 林玉恵「日中翻訳における文化に関する語彙の訳語選びの問題点—『窓ぎわのトットちゃん』を例として—」(『日本語最前線』、2010年)、205-224頁。

背後にある文化を明らかにしたい。さらに、同じ作品を翻訳する際に、大陸と台湾の間で、どのような翻訳上の異同があるかを明らかにし、そこから两岸文化の異同の考察を試みたい。

一 『窓ぎわのトットちゃん』に関する中国語訳本

『窓ぎわのトットちゃん』の中国語版本は、中国大陸の訳本と台湾の訳本に分けることができる。表1に示すように、中国大陸の訳本は様々な出版社によって出版され、管見の限り全部で7種類がある。日本で初版が発行された2年後、1983年の一年間に四つの訳本が次々に出版された。その20年後に2003年版の趙訳が出て、現在市場に唯一流通している訳本となる。

一方、台湾の訳本は13種類があり、日本で初版が発行された同年に、徐思訳が発行された。また1982年には李雀美訳と朱佩蘭訳が出版された。そのあと1983年から2002年までの間に8種類の訳本が出てきた。そのうち、朱曉蘭訳の1988年版と2002年版は訳文の側に中国語の発音を示す注音字母が付いている。ただし、2002年版は出版社が1988年版、1990年版とは異なっている。1993年の李朝熙訳は日中対照翻訳の形で出版された。また2015年に同じ出版社(親子天下出版)から王蘊潔訳、林真美訳の絵本版が出版された。

以上に述べたように、中国語訳本は1981年から2020年まで大陸版と台湾版を合わせて20種類があることが分かった。またいずれの場合も、一年間に幾つかの版本が出版される場合があり、1981年から1989年の間に集中的に出版されている。また、台湾の版本は大陸より形式が豊富であり、注音付き、日中対照、絵本の形があり、読者にとっては選択肢が多いと言えるだろう。

本稿は大陸の1983年の未申訳、朱濂訳、陳喜儒訳、王克智訳と2003年の趙玉皎訳を考察した上で、台湾版の10種類訳本も加えて調査する(それぞれ1981年の徐思訳、1982年の李雀美訳と朱佩蘭訳、1983年の力爭訳、1986年の蕭曉訳、1990年の黃靖淑訳、1992年の燕奴訳、1993年李朝熙訳、2002年の朱曉蘭訳および2015年の王蘊潔訳である)。

表1

版本	作者	書名	出版年	出版社
原作	黒柳徹子	『窓ぎわのトットちゃん』	1981	講談社
大陸	1 未申	『窗旁的小豆豆』	1983.5	中国展望出版社
	2 朱濂	『窗边的小姑娘』	1983.7	湖南少年儿童出版社
	3 陳喜儒、徐前	『窗边的阿彻』	1983.9	少年儿童出版社
	4 王克智	『窗旁的小桃桃』	1983.10	遼寧少年儿童出版社
	5 趙玉皎	『窗边的小豆豆』	2003	海南出版社
	6 趙玉皎	『窗边的小豆豆』	2011	海南出版社
	7 趙玉皎	『窗边的小豆豆』	2018	海南出版社
台湾	8 徐思	『窗邊的小華』	1981.12	鑑賞出版社
	9 李雀美	『冬冬的學校生活』	1982.10	大佳出版社
	10 朱佩蘭	『愛的教育—小徹的學校生活』	1982.11	自立晚報社
	11 力爭	『窗口邊的荳荳』	1983.03	鑑巴出版社
	12 蕭曉	『窗口邊的小豆豆』	1986.09	世茂出版社
	13 朱曉蘭	『窗邊的小荳荳』	1988.07	小暢出版社

14	朱曉蘭	『窗邊的小荳荳』注音版	1990	小暢出版社
15	燕奴	『窗口邊的豆豆』	1990. 11	晨星出版社
16	黃靖淑	『窗邊的小豆豆』	1992. 03	漢風出版社
17	李朝熙	『窗邊的小荳荳』日中対照	1993. 05	鴻儒堂出版社
18	朱曉蘭	『窗邊的小荳荳』注音版	2002	新潮社
19	王蘊潔	『窗邊的小荳荳』	2015	親子天下出版社
20	林真美	『窗邊的小荳荳』絵本版	2015	親子天下出版社

二 文化語彙の翻訳に関して

『窓ぎわのトットちゃん』の原作には、各祝日、政治制度、飲食、慣用語、地名、民俗信仰など日本の特別な文化習慣を表す言葉が多くある。本稿では、これらの言葉に対する中国語の訳語を文化語彙の翻訳として取り上げ、各訳者が読者にどう伝えているのかを考察したい⁵⁾。

文化の翻訳に関して、本稿では異文化要素の日本文化特有の言葉に対する翻訳を指している。大橋(1993)⁶⁾によると、一般に「文化の翻訳」は、芸術や思想のそれであれ制度や技術のそれであれ、「同じ次元内」での水平的な移し置きである。それに対して異領域間でなされる翻訳は、「異次元間」の移し置きである。ふつうの意味での翻訳においては、原書と訳書とでは言語は異なっているが、あくまでも同一性の保持が基軸となる。しかし、異領域間の翻訳に際しては、むしろ作品の差異化がより重要な眼目となると言及した。また榮高悦(2016)⁷⁾は、各国の地理、生活環境、社会制度、民族信仰、宗教、歴史の背景などの違いがあって、文化的な面もそれぞれ異なり、その文化伝統は語彙システムにおいて「文化負載詞」という中国語で呼ばれている。榮(2016)は、「文化負載詞」はある民族や国の豊かな文化の意味が含まれており、その民族や国の文化の特徴を反映していると述べた。

胡敏(2020)⁸⁾、榮(2016)は「文化負載詞」の特徴について以下の三点をあげた。(1)「文化負載詞」はほぼ特定の社会環境に存在しており、ある民族や国の特有の文化を表している。(2)特別な文化的意味と拡張された意味を持っている。(3)「文化負載詞」はそれらの文化的背景と密接に関連しているため、異文化に同等の言葉を見つけることは困難また不可能の場合が多い。また榮(2016)によると、「文化負載詞」は大きく、生態文化負載詞、物質文化負載詞、社会文化負載詞、宗教文化負載詞、言語文化負載詞ができる。

筆者は先行研究に基づき、訳本の状況を考えた上で、文化の翻訳に関して以下の四つの面に分けることにする。(1)民俗信仰関連の言葉の翻訳、(2)社会文化関連の言葉の翻訳(例えば経済、政治、制度、技術的な面である)、(3)物質文化関連の言葉の翻訳(例えば、食べ物、建築、服装などの面である)、(4)俗語、慣用語の翻訳である。

5) 中国語では「文化負載詞」の翻訳といい、それに対応する日本語として、本稿では「文化語彙」を用いる。

6) 大橋良介『文化の翻訳可能性』、人文書院、1993年。

7) 榮高悦等「藏族格言诗中文化負載詞翻译研究」(石家庄铁道大学学报(社会科学版)、第10卷、第2期、2016年)。

8) 胡敏「生态翻译视角下文化负载词汉译英的三维转换」(安徽工业大学学报(社会科学版)、第37卷、第1期、2020年)。

三 民俗信仰関連の言葉の翻訳について

筆者の調査によると、『窓ぎわのトットちゃん』中国語訳の文化の翻訳に関する語彙は73語がある。以下の二つの表は73語の中から民俗信仰の言葉に関する9語を抽出したものであり、それぞれ神様、寺、神社関係の言葉、民間行事関連の言葉、妖怪関連の言葉に属している。表2は大陸版の各訳語であり、表3は台湾版の各訳語である。訳語の後の番号は訳文の中、訳文の小節の末尾、訳文ページ下の欄外に説明、注釈があることを表している。

文化関連の言葉の翻訳は「異化」、「帰化」及び「注釈」という訳し方がよく言及される。林玉恵(2010年)⁹⁾は『窓ぎわのトットちゃん』における文化関連の言葉に対する中国語訳は「意識型、音訳型、直訳型、代用型、説明型、注釈型、新語型、省略型、不訳型、複合型」の10種類に分類した。その中で、「意識型、代用型、新語型」はそれぞれ「原語の意味に従って訳すこと。目標言語に存在する代用物や類似物で訳されることであり、目標言語にある事物に置き換えること。訳者による新しい言葉を作ること。」と説明した。林(2010年)は詳しく分類したが、「意識、代用型、新語型」には実際には大きな差別がなく、「意識」の更なる分類だと考えられるため、本稿では全て「意識」として取り上げる。また林(2010年)は「注釈型」を独立した一種類として取り上げたが、注釈は訳語に依存するものであり、独立の存在ではないと考え、本稿では「移植+注釈、意識+注釈」という形で用いる。

本稿に取り上げる言葉は『窓ぎわのトットちゃん』における文化関連の言葉の全体ではなく、民俗信仰関連の言葉9語である。これらの9語の訳し方について「移植、移植+注釈、意識、意識+注釈、説明、削減¹⁰⁾、省略」の7つにまとめる。

表2¹¹⁾ 大陸訳本における民俗信仰関連の言葉の訳語

	黒1981	未申1983	朱濂1983	陳喜儒・徐前1983	王克智1983	趙玉峻2003
1	仁王さま	哼哈二将	哼哈二将	仁王神③	哼哈二将	仁王的塑像
2	天狗さま	天狗	天狗	天狗④	天狗神⑧	天狗
3	九品仏	九品佛	九品佛寺	九品佛寺	九品佛寺	九品佛
4	弁天さま	弁財天①	弁天佛	辯才天神⑤	财神爷	辯才女神⑩

9) 林玉恵「日中翻訳における文化に関する語彙の訳語選びの問題点—『窓ぎわのトットちゃん』を例として—」(『日本語最前線』、2010年)、205-224頁。

10) 本論文では翻訳されなかった箇所については、翻訳されなかったことによる影響の有無も考察対象とするため、「削減」という形で、翻訳の一形態としてあげる。

11) 表1の番号は文章に注釈があることを表している。注釈の内容は以下の通りである。それぞれ「①佛門七福神之一。②五月五日 日本の男児童、有男孩的家庭在这一天把把布制的鲤鱼升起、以示庆祝。③佛寺門前的金剛、我国称作哼哈二将。④日本人想象中的妖怪、人形、有两翼、脸红鼻高。⑤日本民间传说的七福神之一、是掌管口才、音乐、财富、智慧的女神。⑥日本风俗、端午节挂鲤鱼幡。⑦日本每年三月三日的女孩节。⑧日本传说中的一种山神、有可怕的面孔和大鼻子。⑨5月5日端午节、日本男孩节、人们做几条几米长的红蓝、黑色布鲤鱼挂在旗杆上、希望小孩长大有大的发展。⑩是日本神话中的七福神之一、掌管音乐、辩论、财富、智慧、延寿、除灾得胜等。⑪在日本、五月五日 是男孩节。这一天、有男孩的人家通常要挂起用布或者纸做的鲤鱼旗、以示庆祝。⑫在日本、三月三是女孩节、也称为偶人节、这一天、有女孩的人家在家里搭设坛架、陈列偶人。」である。

5	鯉のぼり (競争) / 鯉のぼり (の歌)	布制鲤鱼比赛② / 升鲤鱼旗之歌	升鲤鱼旗比赛 / 升鲤鱼旗之歌	钻鲤鱼赛跑 / 鲤鱼跳龙门⑥	鲤鱼跳龙门⑨ / 鲤鱼登龙门	钻鲤鱼比赛 / 鲤鱼旗之歌⑪
6	ひな祭り	女孩节	女孩节	桃花节⑦	女孩节	偶人节⑫
7	鬼	鬼	鬼	小鬼	鬼	鬼
8	オバケ	妖怪	鬼	小鬼 / 鬼	妖怪	妖怪
9	山伏	修行僧	山中的修行僧人、也叫山伏	和尚	朝山拜佛的道人	山中修行的僧人

表3¹²⁾ 台湾訳本における民俗信仰関連の言葉の訳語

	黒1981	徐思 1981.12	李雀美 1982	朱佩蘭 1982.11	力争 1983	蕭曉 1986	燕奴 1990	黄靖淑 1992.03	李朝熙 1993	朱曉蘭 2002	王 蕴 潔 2015
1	仁王さま	削減	仁王神像	哼哈二將	仁王爺②	仁王神像	仁王像	仁王老爺	哼哈二將	仁王爺④	哼哈二將
2	天狗さま	削減	天狗神	天狗①	天狗	天狗神	天狗神	天狗	天狗神	天狗	天狗
3	九品仏	削減	九品佛	九品佛	九品佛	九品佛寺	九品佛寺	九品佛寺	九品佛寺	九品佛寺	九品佛
4	弁天様	迎神賽會	弁天神	七福神之一的弁財天神	弁天王	弁天佛	弁天佛	弁天王	弁天神	牟天王 ¹³⁾	辯天神
5	鯉のぼり / (競争) 鯉のぼり (の歌)	升鯉魚 / 升鯉魚 (の歌)	(穿) 鯉魚旗 (比賽) / 鯉魚之歌	鯉魚旗比賽 / 鯉魚旗歌 (男孩節歌)	爬 鯉魚 (競賽) / 鯉魚跳龍門	鯉魚旗競賽 / 鯉魚旗歌	鯉魚旗競賽 / 鯉魚旗歌	鯉魚旗競賽 / 鯉魚旗之歌	鯉魚旗比賽 / 鯉魚旗歌	鯉魚旗競賽 / 鯉魚旗之歌	鯉魚旗賽跑 / 鯉魚的歌
6	ひな祭り	省略	快樂天使	女 孩 節 (の歌)	娃娃祭	偶人節	偶人節	女童節	偶人祭	偶人節	偶人節
7	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	黑鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼
8	オバケ	鬼 / 魔鬼 / 怪物	鬼	鬼	妖怪	魔鬼	魔鬼	妖怪	妖怪	妖怪	鬼
9	山伏	和尚	小和尚	削除	山伏③	山僧	山僧	山僧	山僧	山僧	山僧

「移植」に関しては表2と表3の例2のように、「天狗さま」に対して、未申訳、朱佩蘭訳は「天狗」、王克智訳、李雀美訳は「天狗神」と訳されている。例1、例2、例3のように「仁王さま、天狗さま、九品仏」に対して、訳者はほぼ日本語の「仁王、天狗、九品」を借り、中国語に移植したと言える。訳語の後に「神、王、佛、佛寺、爺、老爺」、いずれかの語を用いられるか、訳すかどうか、訳者によってやや違いが見られる。つまり、神と関わる称呼は数多くの訳本は主に「移植」を利用し、ほぼ工夫して

12) 表2の番号は文章に注釈があることを表している。注釈の内容は以下になる。それぞれ「①一種想像的妖怪、人形、有兩翼、臉紅鼻高。②「仁王爺」寺廟旁的守護神。③山伏-隱住山中的人或佛道休養，生活山野中的僧侶。④寺廟旁的守護神。」である。

13) 「弁天さま」に対して、朱曉蘭訳は「牟天王」と訳した。林(2010)はこれを「誤植」として扱い、「弁」は「牟」に誤植したと指摘した。筆者の調査によると、小暢出版社の朱曉蘭訳と新潮社の朱曉蘭訳(注音付き)は「弁天さま」に対する訳語は全て「牟天王」である。異なる出版社であるが、訳語は相変わらず「牟天王」であることから、誤植であるならば訂正された可能性があったのではないかとの疑問を禁じ得ない。簡単に「誤訳・誤植」と判断するのは難しいのではないだろうか。本稿ではこの訳語について詳しく取り上げないが、今後の課題としたい。

おらず、日本語のまま中国語に移したと言える。「移植」を用いた場合、同時に注釈を付けることがよく見られる。全16箇所のうち、8箇所が「移植」の訳語に対する説明である。

「意識」に関して、表2と表3に示すように、例4の「弁天さま」に対して、徐思訳と王克智訳はそれぞれ「迎神賽會、財神爺」と訳した。また例1の「仁王さま」の訳語の「哼哈二將」のように、完全に中国読者によく知られ、親しまれているイメージへ変化させた。これらの言葉は注釈付きの場合が少ない。また、日本語漢字と仮名とが混ざっている文化語彙及び仮名だけの語彙に対して、訳者は原語の意味を理解した上で中国語にある概念に置き換え、意識した場合も多く見られる。例えば「ひな祭り」に対する「女孩節、桃花節、偶人節、快樂天使、娃娃祭、女童節」、「鯉のぼり」に対する「升鯉魚旗、鯉魚跳龙门」、「オバケ」に対する「妖怪、鬼、魔鬼、怪物」などである。「ひな、のぼり、オバケ」の訳語の種類が多いのは、創造する余地があるからであると言える。特に「ひな祭り」に対して、行事の主旨、気持ち、形式など様々面から訳されたと言えよう。例えば、「女孩節、娃娃祭、女童節」は行事の主旨を考慮した訳だと言える。「快樂天使」という訳語はこの行事が楽しいものであることを表現した訳であると言える。「偶人節」と訳したのは、親が子供のために人形を飾る行事であることから訳されたと言えるだろう。「桃花節」は桃の花には邪気を祓い魔除けの信仰の力があるという信仰から訳されたと言えるだろう。先に紹介したように、注釈は全16箇所あり、8箇所は「移植」の訳語に対する説明であり、残りの8箇所は「意識」に対する解釈である。

「説明」に関しては、表2の例9と表3の例4のように、朱濂訳、王克智訳、趙玉峻訳は「山伏」に対して、それぞれ「山中的修行僧人、也叫山伏、朝山拜佛的道人、山中修行的僧人」と訳され、徐思訳は「弁天さま」に対して、「七福神之一的弁財天神」と訳され、中心語(被修飾語)に中心語を修飾する言葉や句(定語)で更に説明を加えている。

「削減」は表3の例1、例2、例3のように、徐思訳は「仁王さま、九品仏、天狗さま」に関する章節をすべて削除している。徐思訳は章の削減だけでなく、語句の添加もよく見られるが、本稿では詳しく紹介しない。

「省略」は表3の例6のように、徐思訳は「ひな祭り」を省略している。一方、同じ章に出てくる「鯉のぼり」に対して、翻訳している。「ひな祭り」の歌を「另一首歌」という「ひな祭り」を避ける訳し方をしていると言えるだろう。

本稿では15種類の訳本における文化関連の語のうち9語を取り上げた。筆者の計算によると、9語の訳語は全135個ある。訳本全体からみると、「意識」103箇所、「移植」59箇所、「説明」、「削減」各4箇所、「省略」1箇所の順に多い。その中で「削減」は台湾版に集中しており、「説明」はほぼ大陸版に集中している。また注釈は全16箇所のうち大陸版に12箇所あり、陳喜儒訳の4箇所が最も多く、台湾版は力争訳2箇所、朱佩蘭訳と朱曉蘭訳各1箇所の4箇所しかない。注釈の内容からみると、大陸版は詳しい説明を付けたが、台湾版の注釈は簡潔な短句で簡単に説明する傾向がある。

「意識」と「注釈」と共に最も多いのは陳喜儒訳であり、それぞれ6箇所と4箇所である。その一方、力争訳は「注釈」と「移植」が最も多く、それぞれ6箇所、2箇所ある。その他の訳本は特に突出している点がない。

四 『窓ぎわのトットちゃん』に関する文化語彙の文化伝達

筆者が取り上げた9語のうち、次に中国伝統文化を源とする「天狗さま、鯉のぼり、ひな祭り」の3語について、これらの言葉の由来、変遷について述べる。また「天狗さま、鯉のぼり、ひな祭り」の各中国訳本の訳語および訳し方から日本文化が中国の読者へいかに伝達されたかを考察する。

1 「天狗さま」について

「天狗」という言葉は中国語にも日本語にもある。日本の「天狗」について、伊藤信博(2007)¹⁴⁾は天狗が元来中国の物の怪で、流星または彗星の尾の流れる様子から来していると述べている。『山海経』に「其状如狸而白首、名曰天狗、其音如榴榴、可以御凶。」とその様子が記されている。現在では赤い顔、鼻が長くそして高い、山伏の姿で高下駄を履き、手には団扇を持つというイメージが一般に定着し、善天狗と悪天狗が存在している。また姚琼(2018)¹⁵⁾は日中の天狗のイメージを比較し、先秦時代に中国の文献資料に「天狗」が登場したと述べた。『山海経』は天狗が狐のように、頭の毛が白い様子を記し、漢王朝以来、「天狗」は不吉な出来事の予兆であると考えられ、人間の肝臓と血を食物にし、さらに社会不安を引き起こす妖怪に進化したと指摘した。一方、日本に広まった天狗は中国の天狗のイメージと完全には一貫していない、特に妖怪のイメージの天狗は大きな認識の違いがある。形成の初段階では天狗のイメージは中国とほぼ同じで、どちらも不吉な兆候を表す流星である。しかし、平安時代以降、日本の天狗は仏教と関連し、仏法への障害もあり、飛ぶ羽を持つ「物の怪」へ具体化し、霊力を持つ存在となる。現在では天狗は悪い面も、仏教に服従し、仏を守るという良い面の両方を有し、より豊かで多様なイメージを持ち、神社の参拝の対象にもなっていると言及した。

また『日本語大辞典』¹⁶⁾によると、日本語の「天狗さま」は①「人に似た想像上の怪物。服装は山伏風、赤ら顔で鼻が高く、翼を持ち飛行自在で、神通力があり、羽団扇を持つ。」、②「修験道の修行をする人。山伏。」、③「自慢すること。また、その人。」という三つの解釈がある。その一方、『汉语大词典』第二卷¹⁷⁾によると、中国語の「天狗」は①「传说中的兽名。」¹⁸⁾、②「星名。」¹⁹⁾と説明されている。つまり、中国での「天狗」の一般的なイメージは狐のように、頭の毛が白い、伝説からの獣の名前であり、

14) 伊藤信博「天狗のイメージ生成について —十二世紀後半までを中心に—」(『言語文化論集』第29巻、第1号、2007年)、75-92頁。

15) 姚琼「中日古代天狗形象考」(『徐州工程学院学报』(社会科学版)、第33巻、第3期、2018年)。

16) 梅棹忠夫、金田一春彦、阪倉篤義、日野原重明(監修)『日本語大辞典』(カラー版)、株式会社講談社、1989年。

17) 汉语大词典编辑委员会、汉语大词典编纂处『汉语大词典』(第二卷下册)、汉语大词典出版社、2003年。

18) 『汉语大词典』によると、「传说中的兽名」の出典は『山海经·西山经』であり、「陰山有獸焉、其状如狸而白首、名曰天狗、其音榴榴、可以御凶。」と記入している。

19) 『汉语大词典』によると、「星名」の出典は以下の五つある。①『史记·天官书』、「天狗、状如大奔星、有聲、其下止地、類狗。」、②裴駰集解引孟康曰、「星有尾、旁有短彗、下有如狗形者、亦太白之精。」、③『隋唐·长孙晟传』、「晟遣降虜覘候雍閭、知其牙内屡有灾变、夜见赤虹。光照数百里、天狗陨、雨血三日、流星坠其营内、有声如雷。」、④宋梅尧臣『八月十三日观长星』诗、「长星彗云出、天狗欲墮鸣。狗扫不见迹、昭昭河汉横。」、⑤清顾炎武『秋山』诗之二、「天狗下巫门、白虹属军垒。」である。

流星または彗星の名前とも言え、不吉な出来事の予兆であると考えられる。現在日本と中国に定着した「天狗さま」のイメージは大きな違いがあると言えよう。中国人は、「天狗」という言葉から日本の「天狗」を想起しないだろう。

『窓ぎわのトットちゃん』の原作によると、日本語の「天狗さま」は上述した①の意味と一致し、現代日本社会に定着した「天狗さま」のイメージである。「天狗さま」に対して、王克智、李雀美、燕奴、李朝熙は「天狗神」を用いた。「天狗神」に対して注釈をつけたのは王克智だけであり、「日本伝説中的一种山神、有可怕的面孔和大鼻子。(筆者訳：天狗神は日本伝説に山を守る神であり、怖い顔と大きい鼻を持っている)」という注釈を付けた。以外の訳本は「天狗」のまま中国語訳本に移したが、注釈をつけた訳本は二つしかない。陳喜儒の注釈は「日本人想象中的妖怪、人形、有两翼、脸红鼻高。」であり、朱佩蘭の注釈は「一種想像的妖怪、人形、有两翼、脸红鼻高。」である。両方とも天狗は日本人が想像した妖怪であり、人の形と似ており、翼があり、鼻が高いと説明した。注釈を通じ、訳者らは読者に日本特有の「天狗」のイメージを紹介しようとしたと言えるだろう。

また注釈がない訳語の「天狗」に対して、中国の読者にとって「天狗吃月(日)、哮天犬」をイメージする可能性もあると考えられる。鄭高咏(2004)²⁰と王鑫(2015)²¹は共に「天狗食日(月)」の伝承に言及し、「天狗食日(月)」は現在でも中国全土に広く分布している民話伝説であると指摘した。その一方、「哮天犬」は明朝に成立した神怪小説『封神演義』の登場人物楊戩の宝の一つであり、小説の『西遊記』と映像作品の『宝蓮灯』にも登場している。上述した『封神演義』、『西遊記』はいずれも小説から改編され、映像化されており、小説にしても、映像にしても、現在中国で幅広く広まっていると考えられる。「哮天犬」は世代を問わずよく知られる存在とも言える。

『窓ぎわのトットちゃん』の訳本が大陸に輸入された1983年頃は改革開放の初期であり、一般読者は日本文化に触れるルートが非常に限られていた。日本文化に触れる機会も、また日本文化に関する知識も乏しかった当時において、「天狗さま」に対して、訳語の「天狗、天狗神」は、注釈がある場合は、読者に日本の独特の「天狗」を紹介されたと言えるが、注釈がなければ、日本語原作にある天狗のイメージの代わりに「天狗吃月(日)、哮天犬」として理解される傾向があったのではないかと考えられる。つまり、一般的な読者の知識で理解されたものが原作と同じではなかった可能性があると考えられる。

2 「鯉のぼり」について

中国の「端午の節句」は旧暦の五月五日であり、菖蒲、蓬で作った飾り物、雄黄酒などで災厄を除け、健康を祈る。亡くなった屈原の霊を守るため、粽を食べ、龍舟競争などの活動を行う。林仁昱(2016)²²によると、「端午の節句」は中国で生まれたが、日本、韓国などの東アジア地域に深く影響を与えてお

20) 鄭高咏「犬のイメージに関する一考察 —中国のことばと文化—」(『愛知大学語学教育研究室紀要』(言語と文化)、第37巻、第10号、2004年)、175-195頁。

21) 王鑫「天狗食日(月)考」(『怪異・妖怪文化の伝統と創造——ウチとソトの視点から』国際日本文化研究センター、2015年)、67-81頁。

22) 林仁昱、阿部泰記訳「歌曲と風俗—台湾「日本語世代」の端午と子供の日の記憶探究—」(『東アジア伝統の継承と交流』、2016年)、白帝社、189-217頁。

り、さらに各国異なる文化風貌に変化している。日本は江戸時代に武士と商人の文化が結合し、「子供の日」という新意義を賦予した。家庭は子供に期待し、彼らが健康に成長し、鯉のように精力に溢れ、「鯉の滝登り」のように家族に栄光をもたらすことを願うのがその趣旨である。明治時代に近代化を促進するため、新暦の五月五日へ改めた。時代が変わっても、菖蒲を主体とする魔除けの伝統は中国から継承され続けている。また、岡崎幸司(2010)²³⁾は台湾の年中行事と家族の調査で、日本の「子供の日」と異なり、粽を食べながら、屈原を偲ぶと指摘した。しかし、林(2016)は、日本が台湾を支配した歴史から見ると、台湾は日本によって新しい意味を与えられた「端午の節句」の記憶も残されていると述べた。

「鯉のぼり」は主に「鯉魚旗比賽、鯉魚跳龍門」に記されている。注釈は四つあり、全て大陸の訳本に集中している。先述したように「鯉のぼり」は二回登場する。それぞれ運動会の競争項目の「鯉のぼり」、五月五日の「お見舞い」の歌としての「鯉のぼり」である。大陸版の注釈は主に五月五日の端午節は日本で男児の日として「鯉のぼり」をあげるお祝い事であると説明した。未申訳、王克智訳は運動会の章には注釈をつけたが、五月五日と日付が明記されている「お見舞い」の章には注釈がない。しかし、陳喜儒と趙玉皎は「お見舞い」の章に注釈をつけた。上述したように、文章に数回出現し、原語と目標言語の間で、大きな文化差異がある言葉に対して、注釈をつけようとしたら、適切な場所で注釈を付けるのは、読者に文章への理解を助けられると言えるだろう。その一方、台湾の訳語は大陸と大きな違いがないが、台湾の訳本には注釈が見当たらない。先に述べた歴史の要因により、注釈がなくても、文化の理解の障害にならないとも言える。また大陸にしても、台湾にしても、中国語に元々ある言葉である「端午節」が用いられていない面から言うと、訳者らは新しい文化習慣や文化概念に身を置き、出来るだけ相手方の習慣、風俗を受け入れ、読者に伝えていくように努力した面が反映されているとも言えるだろう。

3 「ひな祭り」について

「ひな祭り」は日本において、毎年の三月三日に行われ、女子の健やかな成長を祈る行事である。雨宮久美(2017)²⁴⁾によると、日本は三月三日に桃の節句やひな祭りとして親しまれているが、中国の上巳の行事がその源となる。漢代、三月最初の巳の日に水辺で禊祓をしていたことがあり、不祥を除くため祓を行う記事があった。また、水に杯を浮かべる曲水の宴は魏晋の頃からであり、禊祓と関係する。上巳節を定めてから、次第に女兒に関わる行事になった。また時代の変化で上巳の禊祓や曲水の宴が桃花と関連した。曲水の宴は日本の奈良時代に伝えられてから、日本の神道の修祓儀礼と結びつき、江戸時代の頃、桃の節句は雛祭りに変化した。現在では女兒の成長を祝うひな祭りとして定着したと言われている。

「ひな祭り」に関して、「女孩節、桃花節、偶人節、快樂天使、娃娃祭、女童節」など様々な訳語がある。この訳語を通じ、「ひな祭り」行事の主役、気持ち、形式などをわかるようになった面もある。「桃花節、偶人節」という訳語に対して、大陸版はここでの「桃花、偶人」は節句と関連していることを考

23) 岡崎幸司「台湾の年中行事と家族(現地レポート特集)」(『アジ研ワールド・トレンド』、16(5)、2010年)、8-11頁。

24) 雨宮久美「桃の文化現象一日中比較の視点から」(『国際関係研究』(日本大学)、第37巻2号、2017年)、71-80頁。

慮し、注釈をつけた。訳者らが文化要素を帯びており、読者に親しまない言葉であっても訳語として使用したことは、異文化や文化の多元性を中国読者に紹介することに繋がったと言えるだろう。

おわりに

本稿は『窓ぎわのトットちゃん』に関する20種類の中国語訳本を整理し、中国語訳15種類を取り上げ、民間信仰の文化語彙の訳語を調査した。全体的に見ると、訳本の共通点として以下の点をあげることができる。神と関わる称呼の訳し方で最も多く取り入れられている手法は「移植」であり、日本語のままを中国語に移した。日本語漢字と仮名とが混ざっている文化語彙及び仮名だけの語彙に対して、訳者は原語の意味を理解した上で中国語の概念を置き換える場合が多い。原作で複数回出現する同一の言葉は、違う訳語で変化をつけて訳された場合も見られる。

また大陸版と台湾版の訳語を比較すると、言葉の選び方は大きな違いがないと言える。最も大きな相違点は、注釈の有無である。表2と表3に示したように、大陸版は注釈が全12個あるが、台湾は4つしかない。注釈の内容からみると、大陸版は詳しい説明を付けているが、台湾版は主に簡潔に説明している。注釈の有無及び注釈の内容によると、大陸の訳者ら日本に特有の文化を中国の読者に伝えていく意欲が高いと推測できるのではないか。一方、台湾版には注釈が少なく、また簡潔である理由として、台湾は日本に支配された歴史で、日本文化が現在の台湾にも残っている点が考えられる。台湾の読者にとって上述した言葉への理解は大陸の読者より容易であることを指摘することができる。

さらに、筆者は中国伝統文化を源とする「天狗さま、鯉のぼり、ひな祭り」がどのように中国語訳に訳されるのかを比較初歩的な考察を試みた。現在の日本と中国のいずれにも存在する、それぞれ新しい意味や精神を持つようになった同じ言葉に対し、訳者らの訳し方の選択は文化の伝達に色々な影響を与えと言える。また日中同形語が多くあることから、翻訳する際にそのまま中国語に移した場合がよく見られる。特に文化関連の語彙を翻訳する際に、原作の文化要素を配慮する必要があると考えられる。従って、注釈の役割が非常に大きいと言えるだろう。同形語であっても、意味や文化要素が異なる場合が少なくない。訳語に訳者による説明がない、あるいは不足している場合、読者が原作のイメージの代わりに読者の言語における似たものとして理解する可能性があると言える。一方、ある文化語彙に対して理解し難いと訳者が判断すれば、中国語にある文化語彙あるいは読者によく知られる言葉に置き換える場合も多くある。新しい文化習慣や文化概念にいかにか訳し、読者に伝えるかは訳者しだいである部分が大いと言えるのではないだろうか。

最後に、本稿では『窓ぎわのトットちゃん』の民間信仰関連の言葉に関する翻訳を考察したが、これらの言葉は中国大陸と台湾の他の文学作品で各時期にどのように紹介されているか、文学作品の以外の媒体でどのように説明されるか、訳者には日本文化に関する十分な知識があるかどうか、また『窓ぎわのトットちゃん』に見られる中国大陸、台湾の間の翻訳の相違点は同時期の他の作品にも合致するかという問題は考察することができておらず、今後の課題としたい。

